

子どもの職業意識 (2) 「好きだから」言説に注目して

— JELS2003 報告 —

中島ゆり (お茶の水女子大学大学院)

1. はじめに

子どもが自分の将来の仕事を考えるとき、「好きだから」ということを理由としてあげることには落とし穴はないのだろうか。本報告は、「好きだから」という言説が、職業志望においてどのように作用しているのかを、子どもの性別と学校でのパフォーマンスとの関係から明らかにしようとするものである。

現在、「フリーター」や「NEET」といったカテゴリーの流布にみられるように、研究者、行政、マスメディアにおいて学卒無業者の増加が問題になり、さまざまな形で就業に向けての「教育」が重視されるようになってきている。子ども向けの仕事についての本の出版や、仕事の内容を紹介するようなテレビ番組の放映にはじまり、文部科学省もキャリア教育に関する審議会を設けている。文科省の審議会「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」は2004年1月に答申を提出し、キャリア教育の重要性を訴え、子どもの精神的・社会的自立を促し、一人一人の発達段階に応じてそれぞれの勤労観、職業観を発達させることを目標としている。

これらの意図するところは、子どもに自分の好きなことをじっくり考えさせ、学校を卒業すると同時に、子ども自らがその職業に就くことを目指して行動することである。しかしながら、子どもが得るであろう情報はかれらの生活圏のなかのものにとどまると予想される。それは社会構造的な要因がかれらの好みを規定する可能性を意味している。つまり、子どもにとって好きなものを見つける作業は、文化的・経済的・社会的要因や性別によってあらかじめ水路づけられている可能性がある。

本報告では、「好きだから」言説と職業志望との関係を性別と学校でのパフォーマンスを軸に分析を試みたい。

2. データ

○「青少年期から成人期への移行についての追跡

的研究 (Japan Education Longitudinal Study: JELS2003)」(お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」)

○調査時期と対象校

- ・関東地方の1市(以下、Aエリア)にある約半数の公立小学校、中学校、高等学校
- ・小3、小6、中3、高3を対象
- ・児童・生徒質問紙調査(2003年10月～12月に実施)
- ・学力調査(算数・数学、国語)(2003年10月～12月に実施、中3のみ2004年1～3月に実施)

○Aエリアの諸特徴(参考:お茶の水女子大学 COE プログラム [2005;3])

- ・人口 256,791人(平成16年9月1日現在)
- ・学校数 小学校28校、中学校15校(うち対象校は小学校14校、中学校8校、高校10校)
- ・私立中学校等への進学状況
平均14.2%(調査データから算出)
- ・県内公立高校への進学状況 74.9%

○Aエリアの回収状況

- ・小3…回収数1118(配布数1161、回収率96.3%)
- ・小6…回収数1164(配布数1202、回収率96.8%)
- ・中3…回収数1057(配布数1128、回収率93.7%)
- ・高3…回収数1438(配布数1969、回収率73.0%)

本報告では以上のデータのうち小中学生のデータを用いる。

3. 分析枠組み

3-1. 学力と職業選択との関係

職業には女子向き、男子向きと考えられているものがあり、子どもは性別によって異なる進路に水路付けされていく、ということが先行研究で指摘されてきた。JELS2003のデータによれば、子どものしたいしごとは性別で明らかに異なっている。したい職業のベスト3は、小3の女子で順にお菓子屋(14.8%)、お店(9.4%)、マンガ家

(6.3%)、男子でプロスポーツ選手 (35.9%)、サラリーマン (4.5%)、大工 (4.2%) となっている。中3でも性別によるちがいは明確であり、女子は保育士 (13.1%)、デザイナー (5.5%)、看護師 (3.8%)、男子は教員 (8.0%)、プロスポーツ選手 (7.4%)、公務員 (4.3%) となっている (寺崎 2005)。

寺崎 (同) はこれらの志望職業と学力との関係に注目し、看護師や保育士を志望する者は相対的に学力の低いほうに位置していることを指摘している。これらの職業が女子の職業志望の比率が高いものであることは注目すべき点である。先行研究では学校という選抜システムのなかで、男子は業績主義的なパフォーマンスのみが要求されるが、女子はそのほかに女性性も要求されると指摘されてきた。女性性は業績主義とはベクトルが反対であり、学校における業績主義的な失敗は女性性への受容を促し、女子は業績主義的な競争からすすんで下りていく。このような知見を考慮に入れるとき、看護師や保育士などの女子の志望率が多い職業と学校でのパフォーマンス、なんらかの‘女性性’の受容にはどのような関係にあると考えられるだろうか。

3-2. 職業志望と「好きだから」言説

ここで、「好きだから」という言説に注目したい。JELS2003 の調査において、職業志望の理由として「好きだから」と回答した者は一定数存在したが、学年、性別、志望職業で差がみられた。寺崎 (2005) は、小中学生に将来したいしごととその理由を尋ねた自由記述の回答から「好きだから」その「しごと」をしたいという回答が学年とともに増加すること、男子よりも女子に多いこと、保育士や看護師を志望する者に多いことを指摘した。それでは、「好きだから」言説は職業志望にどのような効果をもたらしているのだろうか。

寺崎 (同) は久木元 (2003) の議論をふまえ、「好き」や「やりたいこと」といった言語的資源は個人の内在的な動機であるため他者からの介入を困難にするものであり、「利用することでそれ以上判断を停止してしまうような言語的資源を多用することが、属性や他の構造的な要因によって偏りがある場合、その帰結には重大な違いが生じる可能性がある」と指摘する。さらに、「し

ごと』を志望する理由として特徴的に『好き』や『人のため』という言語的資源を用いる割合が高い『しごと』があり、特定の集団がそれを志向する傾向があった場合にも同様の問題が起こりうる」と主張している。この結果から寺崎は、学校が「好きなことを伸ばす」という言説を望ましいこととして子どもに伝えることは、「不本意な配分を不本意と思わせない効果、さらには選抜のプロセスからすすんでおける効果を持つてしまうのではないだろうか」と危惧する。

前に述べたように現在進められようとしているキャリア教育やマスメディアの論調は、子どもが自分の好きなことを見つけ、それを伸ばすことを目的としており、それは学校的なパフォーマンスの重視とは異なるものである。これまでの女性研究が指摘してきたように、業績主義的な価値とは別の価値への傾倒は、業績主義的な競争からおろりときの印籠となり、競争からの離脱を加速させる。

このような問題意識から、以下では「好きだから」という言説が、看護師や保育士などの女子の志望率が多い職業を志望することと学校でのパフォーマンス、‘女性性’の受容との関係にどのように作用しているのかを分析していく。

4. 分析

*発表は当日配布レジュメに沿って行います。

参考文献

- 久木元真吾 2003 『『やりたいこと』という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結』『ソシオロジ』148号
- Hochschild, A. R. 1983=2004 『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社
- 渋谷望 2003 『魂の労働—ネオリベラリズムの権力論』青土社
- 寺崎里水・中島ゆり 2005 「小・中学生の『やりたいしごと』」『JELS 第4集細分析論集(1)』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE
- 寺崎里水 2005 『『好き』を入り口にする職業選択の矛盾と限界—子どものやりたい「しごと」をめぐる—』関東社会学会第53回大会報告レジュメ
- 山田昌弘 2004 『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房